江津の万葉ゆかりの地マップ

制作・発行 江津市観光ボランティアガイドの会　tel.0855-52-0534（江津市観光協会内）　2023.12月改訂

柿本人麻呂は、西暦700年代の初めに石見の国の初代国司として赴任しました。そして、ここ江津の恵良の里で依羅娘子を娶ったのですが間もなく都へ戻る別れの日が来ました。その時詠み交わした歌が『石見相聞歌』と呼ばれる作品群です。万葉集巻2（131～139）に掲載されています。この相聞歌群には、江津市周辺の地名が6箇所歌枕として詠み込まれています。今も、石見には人麻呂が生きた約1300年前とさほど変わらぬ風景が残っており、訪れる人を古代の相聞歌の世界に誘います。

❷辛の崎の歌碑
（昭和62年建立）

揮毫者：元京都大学名誉教授
澤潟久孝 先生

碑　文：角障経　石見之海乃
言佐敝久　辛乃埼有
伊久里尓曽　深海松生流
荒磯尓曽　玉藻者生流
（万葉集 巻2 135）

訳　：つのさはふ　石見の海の
ことさへく　辛の崎なる
海石にそ　深海松生ふる
荒磯にそ　玉藻は生ふる

❸二宮交流館の歌碑
（平成10年建立）

揮毫者：元京都女子大学名誉教授
清水克彦 先生

「依羅娘子生誕伝承の里」裏面には地元山藤朝之氏の揮毫で人麻呂の死を知った依羅娘子がその悲しみを詠んだ歌2首が刻まれています。

❹郡庁仮国庁跡
人麻呂の職場があったと伝う地

大化の改新により全国に国・郡・里の制がおかれた。人麻呂が石見の国に赴いた頃には国庁舎がまだなかったので、一時期、恵良の郡庁を仮国庁としたとある。

①角の浦

渡津・江津・嘉久志・和木・角本郷・宇屋川・波子の七浦を言います。大崎鼻灯台より江津の万葉展望。

⑯屋上の山（室神山）
（標高 246m）

別名：室神山、浅利富士、高仙
「…屋上の山の雲間より
渡らふ月の惜しけども…」
（万葉集 巻2 135）

⑭江西駅（人麻呂渡し）

古代山陰道の駅（うまや）の一つで金田町にあったと言われる。近くには人麻呂が大河「江の川」を渡った所とされる“人麻呂渡し”の標柱が見える。

⑮江東駅

古代山陰道の駅（うまや）の一つで松川町八神にあったと言われる。

柿本人麻呂（かきのもと ひとまろ）
●宮廷歌人・国司

万葉集最高の歌人で1300年以上も昔、石見国の国司として角の里の恵良（えら：現在の江津市二宮町）に在った国庁に赴任し、地元の女性、依羅娘子と出会い妻にめとる。上来に際し妻との別れを詠んだ石見相聞歌は、万葉集で最高の歌といわれています。

駅（うまや）とは？

古代の官道に30里（今の16km）毎に設置された、役人の通行に供された施設。石見国には六つの駅があり各駅には5頭の馬が常備され「○○の駅（うまや）」というように呼ばれていた。

依羅娘子（よさみのおとめ）
●人麻呂の妻

人麻呂の石見での妻といわれる。地元恵良の里長の娘で、教養と美貌を兼ね備えた女性で、今でも地元の人は「恵良姫さん」とよぶ。人麻呂と出会ったのは10代半ば過ぎであったといわれ、人麻呂との別れを詠んだ歌一首と、人麻呂の死を知って詠んだ歌二首が万葉集に残る。

⑰樟道駅（くすち）

古代山陰道の駅（うまや）の一つで樟道駅とされているが大化年間から平安初期頃までは松川町上津井にあったと言われている。

⑪人麻呂と依羅娘子の銅像と記念碑（歌碑）

万葉銅像建立実行委員会が高角山公園に設置。銅像は平成18年建立。銅像制作は地元彫刻家 田中俊晞氏。記念碑（歌碑）は、地元書道家 山藤耕子氏の揮毫（きごう）で、人麻呂の長歌の一節と依羅娘子の歌1首が刻まれています。

⑫高角山

都濃（角）の郷にある高い山のこと。人麻呂が高角山と詠んだ。

標高470m／別名：島の星山、星高山

⑬靡（なび）けこの山の標柱

「…（略）妹が門見む 靡けこの山」人麻呂の長歌の一節です。古代人は、山を精霊の宿る神秘の地と見ていました。その神々のこもる不動の山（高角山）に向かって「靡けこの山」と叫んだのです。

❺君寺の歌碑（平成5年建立）

揮毫者：元京都女子大学名誉教授
清水克彦 先生

碑　文：勿念跡　君者雖言　相時
何時跡知而加　吾不恋有牟
（万葉集巻2 140）

訳　：な思ひと　君はいへども
逢はむ時　何時と知りてか
わが戀ひざらむ

❻高神（たかがみ）の丘
古代の狼煙（のろし）台があったと伝う地

応神天皇の時、全国に山守部を配置。石見の国の初代山守部として、角山君内麿が恵良の里に移り住みのろし台が置かれた。恵良の里から高角山が望める。

❼柿本神社の歌碑
（昭和44年建立）

揮毫者：元大阪大学名誉教授
犬養孝 先生

碑　文：石見乃也　高角山之　木際従
我振袖乎　妹見都良武香
（万葉集 巻2 132）

訳　：石見のや 高角山の 木の際より
わが振る袖を　妹みつらむか

歌碑は、柿本神社境内にあります。

❽真島

真島の岩頭に立つと北に日本海、南に眼前の和木地区の赤瓦の屋根の向こうに高角山（島の星山）が望めます。

「和木海岸の真島の岩山にあがると…（中略）当時の石見の海の荒涼とした海景は 彷彿とそこにうかび出る感がある。」

－犬養孝著「万葉の旅」より－

❾人丸神社の歌碑
（昭和48年建立）

揮毫者：元九州大学教授
高木 市之助 先生

碑　文：石見のや 高角山乃 木のまより
わかふる袖を　妹みつらむか
（万葉集 巻2 132）

歌碑に隣接して、人丸神社があります。

❿高角山公園 展望台の歌碑
（平成24年建立）

揮毫者：奈良女子大学名誉教授　坂本信幸 先生

碑　文：笹の葉は　み山もさやに　さやげども
我は妹思ふ　別れ来ぬれば
（万葉集 巻2 133）

公園内の高手に、日本海に注ぐ江の川と屋上の山を望む展望台がある。

万葉集「石見相聞歌」 江津ゆかりの地

「屋上の山」と伝わる室神山

通称「浅利富士」といわれ、市民に親しまれている。

「渡りの山」

「渡りの山」は江の川河口東岸の小高い山々であったと言われている。

「辛の崎」にある石見大崎鼻灯台より高角山を臨む。

手前の海岸は、角の七浦とよばれている。（波子・敬川都野津・和木・嘉久志・江津・渡津の海岸を総称）

和多津の荒磯

江の川河口東、渡津の海岸。地元ではこの周辺の海岸を「荒磯」とよんでいる。

恵良の里

人麻呂の妻、依羅娘子が住んだと伝わる。遠くに高角山が見える。

長　歌（万葉集 巻二 一三一）

石見の海　角の浦廻を
浦なしと　人こそ見らめ
潟なしと　人こそ見らめ
よしゑやし　浦はなくとも
よしゑやし　潟はなくとも
鯨魚取り　海邊を指して
和多津の　荒磯の上に
か青なる　玉藻沖つ藻
朝はふる　風こそ寄せめ
夕はふる　浪こそ来寄れ
浪の共　か寄りかく寄る
玉藻なす　寄り寝し妹を
露霜の　置きてし来れば
この道の　八十隈毎に
万たび　かへりみすれど
いや遠に　里は放りぬ
いや高に　山も越え来ぬ
夏草の　思ひ萎えて
偲ふらむ　妹が門見む
靡けこの山

石見の海、角の海辺を
よい浦がないと人は見もしよう。
よい干潟がないと人は見もしよう。
それでもいい、たとえ良い浦はなくても、
たとえ良い干潟はなくても、
角の海辺を目ざして、
にきたづの荒磯の上に、
青々と生い茂る美しい藻、沖の藻がある。
その藻に朝立つ風は吹き寄せるだろう。
夕べに立つ波は押し寄せるだろう。
その波とともにあちらに寄りこちらに寄る美しい藻のように
寄り添って寝た妻を、
「露霜が置くように」残し置いてきたので、
この道の曲がり角ごとに、
幾度も幾度も振り返ってみるけれど、
いよいよ妻の住む里は遠ざかってしまった。
いよいよ高く山も越えて来てしまった。
生い茂る夏草がしなえるように、しょんぼりとして、
私を偲んでいるであろう妻の家の門が見たい。
靡け伏せ、この山よ。

返歌二首

石見のや　高角山の　木の間より　我が振る袖を　妹見つらむか（巻二・一三二）

現代語訳（石見の、高角山の木の間から私が振る袖を、妻は見たであろうか）

笹の葉は　み山もさやに　さやげども　吾は妹思ふ　別れ来ぬれば（巻二・一三三）

現代語訳（笹の葉は、山全体にサヤサヤと音を立てているけれども、私は一心に妻の事を思う。別れて来てしまったので）

長　歌（万葉集 巻二 一三五）

つのさはふ　石見の海の
言さへく　辛の崎なる
海石にそ　深海松生ふる
荒磯にそ　玉藻は生ふる
玉藻なす　靡き寝し児を
深海松の　深めて思へど
さ寝し夜は　幾だもあらず
はふ蔦の　別れし来れば
肝向かふ　心を痛み
思ひつつ　かへり見すれど
大舟の　渡の山の
黄葉の　散りの乱ひに
妹が袖　さやにも見えず
妻隠る　屋上の山の
雲間より　渡らふ月の
惜しけども　隠らひ来れば
天伝ふ　入日さしぬれ
大夫と　思へる吾も
敷妙の　衣の袖は
通りて濡れぬ

石見の海の
辛の崎にある
暗礁に、深海松は生えている。
荒磯に玉藻は生えている。
玉藻のように寄り添って寝た妻を、
深海松のように深く思うが、
一緒に寝た夜は、幾夜もなく、
這う蔦が別れるように別れてきたので、
心が傷んで、
妻のことを思いつつ振り返って見るけれど、
渡の山の
もみじ葉が散り乱れて、
妻の袖もはっきりとは見えず、
屋上の山の
雲間を渡って行く月のように
名残惜しくてならないが、妻の姿が見えなくなった折しも、
もう入り日がさして来たので、
立派な男子だと思っている私も、
衣の袖は、涙で濡れ通ってしまった。

返歌二首

青駒の　足掻きを速み　雲居にそ　妹があたりを　過ぎて来にける（巻二・一三六）

現代語訳（青駒の歩みが速いので、遥か雲のかなたに妻の家のあたりを過ぎて来てしまったことだ）

秋山に　落つるもみち葉　しましくは　な散りまがひそ　妹があたり見む（巻二・一三七）

現代語訳（秋山に散り落ちるもみじ葉よ。しばらくは散り乱れてくれるな。妻の家のあたりを見よう）

監修 / 川島　芙美子
制作 / 江津市観光ボランティアガイドの会